



TITLE:

フォーラムの概要と趣旨

AUTHOR(S):

CITATION:

フォーラムの概要と趣旨. 京都大学高等教育研究 1995, 1: 2-2

ISSUE DATE:

1995-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53470>

RIGHT:

記 録

第 1 回大学教育改革フォーラム

フォーラムの概要と趣旨

【当日の概要】

昨年6月、大学における教育活動そのものを研究し、その改善を図っていくためのセンターとして開設された「京都大学高等教育教授システム開発センター」（学内共同教育研究施設）の主催による「第1回大学教育改革フォーラム——日本の大学教育をどうするか」が、3月2日（13：30～17：30）、京都市左京区吉田河原町の京大会館において、学内外の大学教員を中心に約120名の参加を得て開催された。

フォーラムは、まず岡田渥美センター長の挨拶と趣旨説明に始まり、井村裕夫総長の挨拶、草原克豪文部省高等教育局審議官（当時）の来賓挨拶に続き、永井道雄国際文化会館理事長による「今後の大学教育の在り方」と題する基調講演が行われた。次いで、天野郁夫東京大学教育学部長による「教育機関としての大学の課題」、梶田勲一同センター教授による「大学の教育方法の何が問題か」という2つの問題提起を受けて、大西昭男関西大学前学長、北垣宗治敬和学園大学学長、皇紀夫京都大学教育学部教授の3人のコメンテーターを交えて討論が行われ、最後に岡田センター長による総括と挨拶で閉幕となった。

【趣旨】

日本の大学は、現在、大きな変革期にあります。大学設置基準の大綱化、教養部・一般教育部等の改組再編、大学院重点化への動きなど、従来の大学の枠組み自体が大きく揺さぶられ、それぞれの大学ごとに抜本的な改善改革の方向を求めて模索している姿が見られます。こうした中で、教育機関としての大学のあり方を、あらためて問い直す動きも強くなっています。

当然のことながら、大学は学問の府として高度な研究機能を持たねばなりません。しかしそれと同時に、学生を教育していく教育機関でもあります。特に現代の大学は、もはや一部の知的エリート層のためのものではありません。わが国の大学進学率が、同年齢層の4割近くに達しているという事実に象徴されるように、小・中・高等学校の後に来る教育機関、という社会的意味が強くなっています。しかし問題は、そうした意味での教育機関として、現実に十分な形で機能しているかどうかです。

大学によってはこの点について深い反省をおこない、自己評価・自己点検を行いつつ、大学内での教育活動のあり方を改革する試みを始めています。そこには具体的に、学生による講義・演習等の内容・方法をめぐっての評価、それらの目標やシラバスの事前公開と関係者相互の検討・助言、外部の専門家による点検・評価と改善改革に関する意見の聴取、卒業生や一般社会からの意見聴取、等々といったさまざまな試みが見られます。さらには、そうした評価・点検の結果を『大学白書』として公刊し、社会各層の方々から率直な意見をうかがう動きも強くなってきています。

こうした中で、京都大学に、大学における教育活動のあり方を研究・検討し、その改善改革を図っていくためのセンターとして、今般「高等教育教授システム開発センター」が設立されました。そして、その最初の公開研究集会として、「第1回大学教育改革フォーラム・日本の大学教育をどうするか」を開催する運びとなりました。関係の方々に広くご参集いただき、今後における大学教育の改善改革のあり方について、率直に意見交換をはかる機会にしたいと願っております。